

共同研究の経過と概要

荒木和憲

本研究報告は、二〇一六年度から二〇一八年度にかけて実施された国立歴史民俗博物館基幹研究「中世日本の国際交流における海上交通に関する研究」の成果をまとめたものである。本共同研究は、「歴史文化資料に基づく日本中世社会像の再構築」（全三ブランチ）の一ブランチとして設定されたものである。

一 目的と方法

前近代の東アジア国際交流史に関する研究は、近年、きわめて活発であり、「人」「モノ」「情報」の移動・交流の具体的な様相を明らかにする研究が豊富に蓄積されている。一方、そうした移動・交流を支える基盤（インフラ）としての「海上交通」も重要なテーマであるが、資料や方法論の制約も相俟って、どちらかといえば副次的なテーマとして扱われる場合が多く、また対象とする時代・地域によって研究の進展状況は様でない。

近年の中世日本国際交流史研究において、海上交通史的視点からの歴史像の転換を最も迫られているのは、日宋貿易（一〇〜一三世紀）の分野である。一一世紀後半以降に日本人商人が日宋間を往来するようになったとする通説が否定され、一三世紀後半頃までは中国商人が往来し

ていたとする説が有力となっており、その来航地である博多の国際貿易都市としての地位を従来以上に高く評価する傾向も強まっている。近年の研究成果は、日宋間の海上交通のあり方―船体・乗組員・航路などを根本的に見直す必要を迫るものである。

日宋貿易と日元貿易（一三〜一四世紀）との連続性については、日本史学の分野で検討課題となっている。一方、近年の中国史・朝鮮史の分野では、世界帝国である元朝（大元ウルス）の統治下における海上交通の発達、高麗の海上交通の活発性などが明らかになってきている。水中考古学の分野では、東アジア海域における沈没船の調査研究が進み、宋・元・高麗の船舶の船体構造に関する知見が蓄積されている。こうした隣接分野の研究状況に鑑みながら、日元間の海上交通の実態を追究する必要がある。

一四世紀後半に明が海禁⇨朝貢システムを導入したこと、一四世紀末期〜一五世紀初期に朝鮮が明と類似した対外政策を実施したことなどによって、東アジア海域の海上交通における日本と琉球の地位が飛躍的に向上したことが明らかとなっている。日明貿易の研究においては、近年、遣明使の渡航記録である「入明記」の研究が進み、日明間の海上交通の実態を詳しく検討できる状況であるが、日朝貿易・日琉貿易の研究

においては、海上交通に関する基本的な事実関係の積み上げが必要な段階である。また、一六世紀半ば以降に「後期倭寇」（中国海商を中心とする密貿易集団）の来航やポルトガル船の直接来航が相次ぎ、博多の存在を相対化する国際貿易都市が分立したことで複雑化した海上交通網のあり方を把握することも課題である。

このように、中世日本の国際交流を支えた基盤である「海上交通」に關しては、さまざまな課題がある。そこで本研究においては、日本史学・中国史学・朝鮮史学・考古学・民俗学の研究者からなる研究会を組織し、「船体構造」「乗組員」「航海知識」「操船技術」「航路」「港湾」「乗継」「航海信仰」「漂流」などを共通のキーワードとして、各時代の国際交流における海上交通の特徴を明らかにすることを第一の目的とする。さらに、中世日本の国際交流における海上交通のあり方を通時的かつ体系的に整理し、本館の総合展示および企画展示に反映させることを第二の目的とする。

本研究は、あくまで「海上交通」をひとつの切り口として行うものではあるが、従来のイメージが一新されつつある中世日本の国際交流史像を通時的かつ体系的に把握し、新しい日本中世社会像の構築に繋げようとするものである。

二 研究組織

〔共同研究員・館外〕五十音順、所属・職名は二〇一八年度

伊藤幸司 九州大学大学院・教授

榎本 渉 国際日本文化研究センター・准教授

岡 美穂子 東京大学史料編纂所・准教授

佐々木蘭貞 九州国立博物館・研究員

出口晶子 甲南大学・教授

藤田明良 天理大学・教授

森平雅彦 九州大学大学院・教授

山内晋次 神戸女子大学・教授

四日市康博 立教大学・准教授

米谷 均 早稲田大学・非常勤講師

李明玉 韓国国立文化財研究所・学芸研究士（二〇一八年度追加）

渡辺美季 東京大学大学院・准教授

〔共同研究員・館内〕五十音順、◎は研究代表者、○は研究副代表者

◎荒木和憲 本館研究部・准教授

小島道裕 本館研究部・教授

田中大喜 本館研究部・准教授

○村木二郎 本館研究部・准教授

〔研究協力者〕

池田榮史 琉球大学・教授

木村 淳 東海大学・講師

洪淳在 韓国国立海洋文化財研究所・学芸研究士

三 研究の経過

二〇一六年度

○第一回研究会

実施日…二〇一六年六月一七日（金）～一九日（日）

場 所…長崎県対馬市

参加人数…一五名

研究報告…共同研究の趣旨説明および意見交換

報告 荒木和憲「中世日朝交流における海上交通の基礎的

考察」（於対馬市美津島文化会館会議室）

調査対象…中村家和船関係資料、大山小田家文書（於長崎県立対馬歴史民俗資料館）

踏査対象…海上交通関連遺跡等（於浅茅湾・佐賀・厳原地区）

○国際会議参加・海外調査

実施日…二〇一六年一〇月二五日（火）～二九日（土）

場所…大韓民国

参加人数…四名（山内、村木、田中、荒木）

国際会議…新安沈船発掘四〇周年記念国際会議（於国立海洋文化財研究所）

遺物見学…国立海洋文化財研究所泰安事務所、国立海洋文化財研究所海洋遺物展示館、国立光州博物館

踏査対象…泰安馬島沈船調査地、新安沈船調査地、珍島龍藏山城発掘現場、鳴梁海峡

○資料調査

実施日…二〇一七年一月二〇日（金）～二二日（日）

場所…長崎県立対馬歴史民俗資料館

参加人数…三名（出口、藤田、荒木）

調査対象…中村家和船関係資料、関船模型

○第二回研究会

実施日…二〇一七年三月四日（土）～五日（日）

場所…国立歴史民俗博物館

参加人数…一四名

研究報告…報告一 伊藤幸司「遣明船と南海路」

報告二 藤田明良「東アジアの航海信仰」

構想報告…榎本渉、小島道裕、田中大喜、出口晶子、村木二郎、森平雅彦、山内晋次、四日市康博、米谷均、渡辺美季

五月の第一回研究会では、玄界灘・対馬海峡を往来した船は、主として小型・中型の和船であり、気象・海洋条件に大きく規定されながら、一日一航海を原則とする安全性の高い航海を繰り返して目的地まで到達していることなどが明らかにされた。小型・中型和船の特性と限界は、日朝交流における人・モノの移動のあり方や寄港地・港湾都市のあり方を規定するものであり、その航海の実態を追究する必要性が認識された。あわせて浅茅湾（船上からの海洋環境の観察）、浅茅湾岸（梅林寺、小船越、大船越、尾崎仮宿遺跡など）、厳原・久田地区（中村館跡・池神社・浜殿神社・漂民屋跡・お船江跡など）、佐賀地区（円通寺・宗家館跡・佐賀川など）を踏査した。長崎県立対馬歴史民俗資料館では、対馬藩船大工の中村家に伝来した和船関係資料（記録類、図面類）を調査し、峰町歴史民俗資料館では収蔵展示品（宗家館跡出土品、木坂八幡宮出土品など）を見学・調査した。これらの現地踏査と資料調査によって、小型・中型和船の造船・航海の実態に関する手がかりを得ることができた。

一〇月に韓国で開催された新安沈船発掘四〇周年記念国際会議に参加し、新安沈船の調査研究の到達点を把握するとともに、韓国水中考古学に関する情報収集・文献収集を行った。国立海洋文化財研究所泰安事務所、同海洋遺物展示館、および国立光州博物館（特別展「新安海底船から探し出されたモノ」）では、韓国の海底遺跡から出土した船材・積載品等の遺物を網羅的に見学することができた。また、現地踏査では、沈船調査地である泰安・新安の海洋環境を観察したほか、反モンゴルの海上勢力（三別抄）の根拠地である珍島龍藏山城の発掘現場、「文祿・慶長の役」の海戦地である鳴梁海峡を巡り、韓国の海上交通史に関する知

見を得た。

一月の対馬での資料調査では、第一回研究会からの継続として、中村家船関係資料の調査、および関船模型の調査を実施した。二度にわたる調査の成果として、近世の上方の造船技術が多分に対馬に流入していることなど、種々の知見を得た。中間的な成果として、出口晶子「対馬藩中村家造船文書にみる「漆喰拵え」について」、荒木和憲「資料紹介」長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵『諸船長サ・方・深サ書附』を成稿し、『国立歴史民俗博物館研究報告』（通常号）に投稿した（いずれも二〇一八年度刊行の二〇九号に掲載された）。これらは近世中期段階の造船技術に関する研究成果であるが、近世に付加された技術のレイヤーを除去していくことで、中世の造船・航海技術に迫ろうとする試みである。

三月の第二回研究会では、まず日明交流に関しては、遣明船の航海ルートとして、従来、十分な検討がなされてこなかった四国―南九州ルート（「南海路」）の利用の実態に迫り、メインルートである瀬戸内―博多ルートを補完するサブルートとして一定の役割を果たしていたことが明確になった。東アジアの航海信仰に関しては、中国における航海神は国家的航海神、龍王、観音―仏教系信仰、各地方の諸神の四類型に分類され、それぞれが海域交流の担い手の階層性と分かちがたく結びついていることや、宋代から清代に至るまでの媽祖信仰の展開過程、そして一六世紀以降の日本における媽祖信仰の展開と船玉信仰への影響が明らかにされた。遣明船以後の日明交流の実態を明らかにするための手がかりとなる成果である。また、今後個別報告を予定している共同研究員の各位から構想を報告してもらうことで、本共同研究の方向性を固め、これを共有することができた。

二〇一七年度

○現地調査兼研究会

実施日…二〇一七年五月一九日（金）～二二日（日）

場 所…長崎県松浦市・平戸市・長崎市

参加人数…一四名

研究報告…佐々木蘭貞「鷹島出土の木材などから見える船体構造について」（於松浦市歴史民俗資料館）

いて」（於松浦市歴史民俗資料館）

調査対象…鷹島海底遺跡出土の船材・碇石等（於松浦市埋蔵文化財センター、松浦市歴史民俗資料館）

ンター、松浦市歴史民俗資料館）

船幟、蛮錨図及び付属文書（於松浦史料博物館、平戸オラ

ンダ商館）

対馬藩船大工黒岩家文書（於長崎歴史文化博物館）

踏査対象…平戸市内（市街地、田平地区、川内地区、大島地区）

○第四回研究会

実施日…二〇一八年一月二七日（土）～二八日（日）

場 所…国立歴史民俗博物館

参加人数…一六名

ミニシンポジウム…テーマ「一四世紀東アジアの海上交通」

報告一 李明玉「中世東アジアにおける中国・高麗陶磁の

流通」（逐次通訳）

報告二 四日市康博「元代の海上交通」

報告三 森平雅彦「モンゴル時代における朝中間海上交通

の様相」

報告四 榎本渉「日中貿易船の規模」

※韓国・国立文化財研究所との国際交流事業と連携した企

画である。

○資料調査

実施日…二〇一八年一月三十一日(水)～二月三日(土)
場 所…福岡県福岡市、島根県益田市

参加人数…三名(李、村木、荒木)

調査対象…博多遺跡群出土高麗・朝鮮陶磁(於福岡市埋蔵文化財センター)、益田市内出土高麗・朝鮮陶磁(於益田市教育委員会)
※韓国・国立文化財研究所との国際交流事業と連携した企画である。

○現地調査

実施日…二〇一八年三月九日(金)～十一日(日)

場 所…長崎県対馬市

参加人数…二名(佐々木、荒木)

踏査・調査対象…対馬市東海岸・北海岸の港湾、矢櫃の港湾・石積遺構

○現地調査

実施日…二〇一八年三月一三日(火)～一六日(金)

場 所…韓国済州特別自治道・全羅南道木浦市

参加人数…五名(榎本、出口、米谷、田中、荒木)

展示見学…国立済州博物館、済州民俗自然史博物館、国立海洋遺物展

示 館

踏査対象…高麗・朝鮮時代の主要港湾、海上交通関連史跡等

訪問先…国立海洋文化財研究所

○第五回研究会

実施日…二〇一八年三月二十五日(日)～二六日(月)

場 所…国立歴史民俗博物館

参加人数…一二名

研究報告…報告一 村木二郎「陶磁器組成からみた国際航路の検討」

報告二 田中大喜「中世西日本海水運と東アジア交易」

報告三 出口晶子「近世造船文書と民俗資料」

調査対象…冊封使船送迎之図(紙本著色)、蘭船図・南京船図(絹本着色)、唐船輻湊図(紙本著色)、唐船図・綵舟流唐船図(長崎版画)、唐船図巻(複製、原蔵…松浦史料博物館)

五月の現地調査では、長崎県の港湾・史跡等を巡検し、海上交通に関連する資料の調査を行った。松浦市埋蔵文化財センターおよび松浦市歴史民俗資料館では、鷹島海底遺跡に関するレクチャーを受け、発掘された船材・碇石等の遺物を見学した。あわせて佐々木蘭貞氏の関連報告を得た。松浦史料博物館および平戸オランダ商館では、平戸松浦家伝来の船幟、「蛮錨図」等を調査した。また、平戸市内の巡検では、ジャンク船の碇石とオランダ船の鉄錨(市街地)、航海信仰と関連する海寺跡・熊野神社・薩摩塔(田平)、媽祖像(川内)等を巡検・調査した。的山大島にフェリーで渡航し、平戸周辺の海洋環境を観察するとともに、大島では烽火推定地等を巡見し、周辺諸島の島影を視認した。長崎歴史文化博物館では、対馬藩船大工の黒石家に伝来した資料(文書類・図書類・器物類)を調査した。

一月の第四回共同研究会は、「一四世紀東アジアの海上交通」をテーマとしたミニシンポジウム形式で開催した。榎本渉氏(日本史)・森平雅彦氏(朝鮮史)・四日市康博氏(中国史)・李明玉氏(美術史)にそれぞれの立場から「一四世紀東アジアの海上交通」を検討していただき、元朝を中心とする航路・物流網とその時期的な変遷が従来よりも明瞭になる一方、日中間の海上交通における済州島の位置づけをより一層追究する必要性が認識された。李明玉氏は、韓国・国立文化財研究所との国

際交流事業の一環として本共同研究に参加し、博多遺跡群および益田市内出土の中国・高麗（朝鮮）陶磁の調査も実施された。本共同研究において、東アジア各地における中国・高麗陶磁の伝世・出土状況は重要な手がかりとなるため、研究会終了後、共同研究員に加わっていただいた。

三月中旬に現地調査を長崎県対馬市と韓国で実施した。対馬では、中世の航海記録にもとづき、対馬市東海岸の港湾を巡検し、過去の記録と現在の景観等を比較・照合した。朝鮮渡航船の発着地として重要な港湾である最北端の鰐浦では、港湾・周辺地域の景観・環境を陸上と船上から観察した。鰐浦の近辺に位置する矢櫃は、中世に朝鮮の使船が入港したことで知られるが、陸上からのアクセスが困難であるため、調査が実施されてこなかったエリアである。近年、地元の研究者によって石積遺構が発見されたことから、矢櫃に漁船で渡航して調査を行った。対馬市教育委員会の村瀬達郎氏の立会のもと、佐々木蘭貞氏による簡易な測量・潜水調査を実施した。あわせて入江の名称や近代における利用等に関する聞き取り調査も行った。

韓国の現地調査は、済州特別自治道（済州島）と全羅南道木浦市で実施した。国立済州博物館・済州民俗自然史博物館では、展示を見学して海上交通に関連する情報を収集した。高麗・朝鮮時代に大船の入港に利用された禾北浦・朝天浦・於等浦・朝貢川・涯月浦・明月浦、および三別抄の拠点であったハンパドゥリ抗蒙遺跡地、貿易陶磁が出土した水精寺跡、航海信仰の対象である漢拏山の中腹に位置する尊者庵などを巡検した。済州島から木浦へフェリーで渡航し、途上で楸子群島等を視認した。国立海洋文化財研究所では、洪淳在氏と面会し、本共同研究に関する意見交換を行うとともに、海洋遺物展示館および再現朝鮮通信使船建造現場で解説を受けた。洪淳在氏からは、次年度の研究会で珍島出土船に関する報告を行うことについて快諾を得た。

三月下旬に第五回共同研究会を開催した。それぞれの問題関心にもとづく研究報告がなされたが、なかでも中世考古学の立場から、一三〜一四世紀の東アジアにおける航路・物流の変化を、貿易陶磁の定量分析から明瞭に提示されたことは、第四回共同研究会と密接に関連する重要な成果である。館蔵品の調査もあわせて実施し、中国船および琉球船を描いた絵画史料を対象とした。

今年度の研究によって、東アジアの海上交通が一四世紀以前と以後でどのように変化したのか、それにともない済州島の位置づけがどのように変化したのかを追究する必要性が認識されたので、次年度にこの課題に取り組むこととした。

二〇一八年度

○現地調査

実施日…二〇一八年五月一日（金）〜一四日（月）

場 所…五島列島（長崎県五島市・新上五島町・小値賀町）

参加人数…一〇名

○第六回研究会

開催日…二〇一八年七月二七日（土）〜二八日（日）

場 所…国立歴史民俗博物館

参加人数…一七名（共同研究員二名、研究協力者三名、聴講者三名）
報告一 山内晋次「日宋貿易の航路をめぐって」

報告二 洪淳在（韓国・国立海洋文化財研究所）「韓国出土珍島船の構造と特徴」（逐次通訳）

報告三 米谷均「倭寇的狀況下の海上交通」

報告四 佐々木蘭貞「対馬矢櫃の石積遺構に関する調査概

報」

関連報告一 荒木和憲「対馬矢櫃の港湾機能に関する考察」

関連報告二 洪淳在「再現朝鮮通信使船について」(逐次

通訳)

○第七回研究会

開催日…二〇一八年十一月二十五日(土)～二十六日(日)

場 所…国立歴史民俗博物館

参加人数…一四名(共同研究員二名、聴講者二名)

展示見学…企画展示「日本中世の古文書」(フランチC 成果展示)

研究報告…報告一 渡辺美季「日琉交流における海上交通―『琉球御

渡海日記』を中心として―

報告二 岡美穂子「一六世紀イエズス会宣教師報告に見る

日本の海上交通」

○資料調査

実施日…二〇一九年一月二七日(日)～二八日(月)

場 所…大阪市・神戸市

参加人数…九名(出口、藤田、山内、伊藤、四日市、榎本、村木、田

中、荒木)

調査対象…狭山池出土船材の調査(於狭山池博物館)、船屋形の見学

(於相楽園)、航海信仰等に関する海事関連資料の調査(於

神戸大学海事博物館)

○現地調査

実施日…二〇一九年二月二八日(木)～三月三日(日)

場 所…鹿児島県大島郡与論町

参加人数…二名(李、荒木)

調査対象…与論島出土貿易陶磁の調査

五島列島の現地巡検では、福江島から奈留島・若松島・中通島・小値賀島・野崎島へと南北を縦断し、島々をめぐる海洋環境を観察するとともに、遣唐使・遣明使等の対外交渉に関連する港湾・遺跡等を巡検した。具体的な巡検先は、福江島(岐宿地区(水垂、鱸網石、巖立権現・宮小島、金福寺、岐宿城跡)、玉之浦湾、勘次ヶ城、大浜遺跡、石田城址、五島観光歴史資料館、明人堂、六角井戸、常灯鼻、福江湊)、奈留島(鳴浦、海安寺跡、奈留神社、夏井の井戸)、若松島(日島石塔群、極楽寺)、中通島(今里地区(三日ノ浦、舟形石)、青方地区(青方浦、姫神社跡、ともじり石、青方神社)、鯨賓館ミュージアム)、小値賀島(小値賀町歴史資料館、前方湾、地ノ神島神社)、野崎島(野崎遺跡、沖ノ神島神社)である。

資料調査では、海事資料および貿易陶磁の調査を実施した。狭山池出土船材に関しては、一六世紀後半の構造船の船材とする見解があるものの、構造船と判断するための決定的な根拠となる船底材が含まれていないことを確認した。日本造船史における準構造船から構造船への展開については、より慎重に検討する必要があるとの認識を得るに至った。

研究会では共同研究員が分担課題にもとづく個別報告を行い、米谷均氏・渡辺美季氏・岡美穂子氏の報告によって、一六世紀後半～一七世紀前半にかけての中国・琉球―日本間の航路、および宣教師のみた日本の海上交通のあり方が浮き彫りとなった。また、昨年度に実施した対馬矢櫃の石積遺構の簡易調査を踏まえ、佐々木蘭貞氏がその概要を報告するとともに、荒木和憲が矢櫃の港湾機能に関して、その自然地理的条件を勘案しつつ、文献史学の立場から報告した。さらに、洪淳在氏(韓国・国立海洋文化財研究所、造船史)をゲストスピーカーとして招へいたことは特筆すべき点であり、池田榮史氏(琉球大学、水中考古学)なら

びに木村淳氏（東海大学、水中考古学）にも討論者としてゲスト参加していただいたことで、珍島出土船（二三世紀後半）に関する最新の研究成果の共有と活発な議論を行うことができた。珍島出土船については、隔壁構造・充填剤（桐油）・保寿孔の存在から中国船とみる既往説があるが、洪淳在氏は船底材に丸木を使用していることを根拠として、日本の準構造船（和船）とみる見解を呈した。珍島出土船の評価には慎重を要するものの、日本の準構造船の船底構造に関する示唆が得られた。

本共同研究の中間成果として、歴史系総合誌『歴博』二二三号の特集「済州島をめぐる東アジアの海上交通」を企画し、最新の研究成果を研究者だけでなく一般に向けても発信した。森平雅彦氏（朝鮮史）、榎本涉氏（日本中世史）、米谷均氏（日本中近世史）、出口晶子氏（民俗地理学）、李明玉氏（美術史、高麗・朝鮮陶磁）の寄稿を得て、東アジアの海上交通における済州島の位置づけを検討した。とりわけ、日中間を往来する大型船が済州島を寄港地としていなかったという事実が判明したことは大きな成果であるが、その一方で済州島の内陸部および沿海から出土する中国陶磁器は、中国と済州島を結ぶ直接ルートが存在を示唆するものであり、より多角的な検討が必要であることが確認された。

四 共同研究の研究成果

中世日本の国際交流史を海上交通というインフラの視点からとらえなおすため、文献史学（日本史・中国史・朝鮮史）、考古学（中世考古学・水中考古学）、民俗学の協業による共同研究を実施し、共同研究員の専門分野における最新の研究成果を共有した。個別の研究成果については、本特集号に掲載される論考を参照されたい。

本共同研究の全体の方向性としては、具体的なカタチを遺すことのない「海上交通」という事象を追究するにあたり、東アジアの海上交通において重要な位置を占めていた対馬・平戸・五島・済州島で現地巡検

を行い、その海洋環境を観察すること、および海上交通の痕跡をとどめる資料等の把握を進めることに重点をおいた。

歴史系総合誌『歴博』二二三号の特集記事は、済州島巡検の成果にもとづくもので、西北九州（平戸・五島）―中国江南（寧波）間を往来する大型船舶にとつて、済州島は重要なランドマークであり、かつ航海信仰の対象ではあるが、寄港地ではないとの結論に達した。このことは、東シナ海を横断する大型の帆船（ジャンク船等）にとつて、寄港は必須の営みではなく、目的地への直航がある程度可能であったことを示す重要な成果である。

一方、中型・小型の帆船（和船）に関しては、中近世の文献史料が豊富な対馬の事例をもとに追究した結果、一般商船は好天候下の昼間の航海を基本とし、一日単位の出航・寄港を繰り返しながら目的地へと徐々に帆走して移動していたこと、領主の公用船が悪天候下で出航する場合や目的地へ急行する必要がある場合は、大量動員された水手による櫓漕ぎが行われていたことなどが浮かび上がった。

これらは本共同研究の成果の一端にすぎないが、東シナ海を横断する大型船と日本列島近海を往来する中型・小型船とは根本的に運航方法が異なるという事実は、東アジア海域における人・モノの動きをとらえるための重要な視座を提供するものである。船舶の型式・規模、航海の目的、操船の方法の違いなどに留意して船舶の移動の実態を明らかにすることで、海上交通史研究は、移動ルート論にとどまることなく、人・モノの移動、港市の形成、港市間ネットワークの形成など、流通史・都市史などの領域と深く切り結ぶことになるものと期待される。

（国立歴史民俗博物館研究部）